貝盡浦の錦 上

大枝流芳先生著

貝譜 浦之錦

浪花書林
揚芳堂
稱觥堂 繡梓

介譜浦之錦小序

萋兮斐兮成是貝錦詩にのせられ我國にても古今
にも玉やひろひ貝やひろひと詠し事昔より
賞翫しけり古より春風またしは吹よする四方の浦も
浪静かにしてたま拾數校乃兒女の戯とせりぬ浦は猶越
拾集めて此事をもてはやしけるは海士のみ浦人の名を問
好事の人を詠して證を正し古き文によりて考て
みづからにもあるを知りしその年を經て二品ばかりの思
介譜と号し事増にも細か連ね其数を備て其全
と称し小兒の戯をやめて勝にもあらずと此初めてをき
哉ることも也にあるべし　然

己巳姑洗吉辰

大枝流芳自序



あれまさる
色をつくして
よる貝は
かさなれ
浦と



凡例

○介ハ惣名なり其中異類多し此土ニ貝を以惣名とするハ誤也貝子ハ介の中の一物の名今云たからがい子安がいなど云るもの也此貝ハ古へ銭として用ゆ諸の介れ其らり因て此土ニ惣名ニ此字を用るも古へなきにあらざ此書古来さるひ惣名ニハ介の字を用ゆ

○本艸綱目四十五巻介虫の部何れも其中二つニ亀鼈と云蚌蛤と云亀鼈ハ此書ニ取事ニあらざ蚌蛤の類を集綱目ニ集る處の蚌蛤二十九種何れも委き種をの侭

○相貝經ハ貝子の種類を論ず其用多しといへども古来貝を

論るハ古きの世用てかくれて貝全葉一冊此世に流る
○先輩の作りし言あまたの悉く取捨して
こゝに撰貝
○夫いにしへ弄るハ古来ハ只蛤の大なるを三百六十を集め
其うちをかざるに中を絹を以て縷し金銀を点じ五彩の畫を
ほどこし六角の箱に納て其貝を合を以て児女の翫とこそす未
をろくの合を絵かき貝事をさしけ元禄の始比より大小
此弄おこりて都鄙全く時行さて賞鑒家古人の風をとよみ
をさ好古の好城の集て四条大納言公任の撰ひおかる三十六の
歌仙の数に配して是なる三十六歌仙貝となしてもてはやしぬ

其時哥を集るといへども不審なかりし引哥多し因て其後此類を考て新撰の歌仙今世に行る是ハ後歌仙集序中に見えたり然後ハ三十六人とありし也今按るに後に撰し方も委し取用べし

歌仙今の集撰者は姓名をあらさず近年男女のゑて何某如百人一首の書れ上層に合刻して世に行る又伝写の誤多し余別に善本の写本有るを

○綱目曰蚌與蛤同類而異形長者通曰蚌圓者通曰蛤故蚌從丰蛤從合皆象形也後世混稱蚌蛤者非也今世俗にまるぐひ長きを蚌とあり圓きを蛤とあるによりて曆あるを螺と云

又蠃ともいふ又一片無對のものあり石決明の類也又異形の類あり
今。蚌。蛤。螺。無對。異形。の五品をわかち記して又一種。貝。の類ありて
合て六品なり

○今又五十四種の源氏貝あるも是を其巻の帖數に配し名を命
ずるものゝ又須古産に百貝あるも小倉の山荘百首に配せしよし又之
さり乍是も古より何れの介を以五十四帖に配し百首の句に配
せる定例なし又五十四色百色を集め只其數に備ふるのみにて歌仙
介なれども定まれるもなし因て歌仙を以弄貝の名をえらびし歌仙貝は
古歌あまたより好介を撰みき阿き介も類を撰入る今余五十四
種撰て源氏の帖數に當る名目其中にあらし得る源氏介と

云るハ後世の序中に云へたり

○介の衆類甚多し耳目の及ぶ所採摭すといへども天下の介を盡すべきにあらず後の博雅の人を待のみ

○介の名實おびたゞしき中に類聚を諸邦に於て天下古今通用の名を撰の介に至てハ其名一様ならず故多く雷同して又一物にして変化の原莫可名状後の人強て名を命じ或ハ方言或ハ俗称の類を悉く及ぶハ集めがたし是又盡しがたきを以て漢名ハ云ふに不及和名も定めがたきを以て其名と定俗称異名混同して許多ハ其下に附し鮮名形状名義不出不分なるを記し

○前後の出紀介二細ハ方並に圖あり此篇附録として余別にあり其わざ只名目を載て雷同の辞を輩

貝盡浦乃錦巻上

目録

源氏貝配當目録

新撰六歌仙貝

貝盡浦之錦上

諸説

介ハ艶ありて大なるほど、色分明に白きものハ潔白よ赤きハ深紅に斑文あれものハあざやかなるをよしとす蝌蛤乃類ハ合するものハ片に合して不離なるをよしとす又蕞爾の介甚小く小豆米粒のごとくも見るふようなれど五萬識十萬識れ大さも大かりしくわしく只蠶豆の大されどくなるをのちへ見るもの画しゝき除生質大なる介何ぞ精得小なる介を小なるハ大なるんを撰び大なるハ小なるを取ても窮とし介紀ふ集てつゞき形大やうなるよしとき甚得がたし

錦貝ハ雅翫の貝の王なり諸方ニ阿れども丹後但馬乃海邊ニ出るものよし外ハあしし紀州ニハすくなくあるものハ色うすし此貝をなでしこ貝と名付る云をなでしこと云べき貝なれども是とハ別物なりすべて好貝ハ磯多くよりて岩多き海ハ小貝ハよろしからずあしし細砂のある地海よろし摂津ハ海多くハあしく内海ゆゑは好貝あし

紀州和歌浦荒濱加太の淡嶋北濱等ニ至りて尤よき貝多し泉州の海辺ハ好貝なし但州竹野浦好貝多し丹後太鼓濱琴引濱なとより出る貝あるよし余ハ

至りて拾ひし人よりもらひし紀州熊野にてぬ介
あまたよしもらひ見しなり古来諸方にハ珍し此介も
ぬ介もあるべきなれども余も至りて少し人も拾ひ
あらざれば志らず

相州鎌倉雪の下れよび江のしまれなる所に介
東家多く求べく此地にはむらしよりとき
介あまたありと

寶永正徳の比紀州和歌山至る文人并恐々古来年
過ぬれバ拙多くの珍介の名おほく写しと遠ひしもの
多し近来ハ文華さかんにして世上多く介をとてもやはは

より浦人多く集て商ふ歌仙よりて名を呼歌仙の
ことごとくハ雨ふく付し名多くきと見へて雅なれども
佃州に至れバ或人乃物語に語日拾貝と云人ありて
諸国の海邊を行脚して介をひろひて数よし物で
翫しなりける雅人よりは癖の膏肓に入し人
なるべし佃州にも来るよし守しなり
海ハ朔日より十五日迄ハ昼潮ひるに介ねやもし
下十五日よりハ秋がちぎなれバ介拾かたし海ハ多く曇
朝より日中迄の間がよし晩方ハ多く汐みちなり
三月三日ハ大潮乾る事なれ艸の車渠介の下にも見へ〳〵

日本も此日ハ世にあまねく大汐の乾る日なり此日別して介類
多くえやすし
愼懋官が花木考に螺多種掩白而香者曰香螺殼尖長
者曰鑽螺味次之有刺曰刺螺其味辛曰辣螺有曰拳螺斂
螺斑螺丁螺云々さまざまの螺のながくみじかくあるなどの
いろちよくしまる


布引松
塩浜
和歌乃浦の風景
御旅所
出嶋
天神社
和哥町
東照宮
下り松


紀三井寺
塩濱
妹背山
高松

歌仙貝遺漏名貝百餘品

鵠類

鵠貝

鵠の羽のごとく地色青く少し褐色さゝこの斑文鵠の生れどし為きらいえ　和名ある者も於は播磨の海辺にもあれども色悪し

柔牛花貝　和名その名

螺類

形円くして細長くうすく色あさぎのごとし

瑠璃色を帯たる貝なり和名よりいでたる名称なり

拳螺とも云類なり　本艸云青螺色如翡翠とあるハこれなるへし

綾桜貝　和名その名

蚶類 地白く紅のすぢありわざやうなるもあり
こまいなり多くはかゞし和哥より出る
月日介 嶺表録異記ニ号海鏡ト
蛤類 うすく丸し片方赤く片方白し周りに月日乃名
周ありて大なるもの多く小さきもの鮮し和哥ふきての壹れども
此浦よハ稀し他所より来るよし
羽子介 和哥ふきての名 百貝圖ニ公羽貝と云
蚌類 潔白にしく光し鳥の羽根形のごとし但州よ
多し和哥にもあり
海雲介 和哥ふきての名

蚌類（がうのるい） 其形ち蛤れども頭（くらひあたま）あり尾の方に稜あり
色白し淡やかなし先づ此貝なり和名より出る

葵介（あふひがい） 百貝圖に海馬家と云

螺類（らのるい） 大なるもの多し小（ちいさ）きものは稀（まれ）也小（ちいさき）も豌豆（ゑんどう）二粒（つぶ）
の大さあり あふひ貝葉（え）のごとくなればなるより
和名かしたこあふの雄介（をがい）と云なり
名とる色白くかうすき黄への甚だ薄くまれやまし

本艸云鸚鵡螺（あふむら）と云ものの足なるんの頭も蛤に似ると云り

章魚拈（たこ）



螺類（らのるい） 色白し光かしうすし 和名かしたこ葵貝（あふひがい）の雌介と云なり 面白（き）介なり
かやうれ形あり足も鸚鵡螺（あふむら）の類也

按ニ亀蜐ハ亀脚ナリ

駒(こま)が爪(つめ) 和歌浦の名

蛤類(がうのるい) 色白く褐色(かつしよく)の斑紋(まだら)有てまだらなく入る

昔ハ和歌の浦にて歌仙の中の蜑貝(あまがひ)を
この駒が爪といひり今ハまつらしい貝をいふ也

鷲(わし)の爪(つめ) 和歌浦の名 又清めのたしと云事もあり
百貝八圖ニ勢(せい)ト云

異類(いるい) きつまきハ亀蜐(きけ)なり岩に付て有り俗称
しいと云大和本草にかめのてといふ亀の手とも云形り
のりまるとされなり加左(かざ)に多し

蚌類(がうのるい) めくハじや 三才圖會云 江搖(くうぎう)又号指甲螺(むかうら)
長さ七八分斗たいらげに似たり色まだらく薄し

備前(びぜん)牛窓(うしまど)に多しかよハ稀(まれ)なり

胡蝶介　和名浦の名　百貝圖ニ云玉貝ト眞珠是ニアリ

蛤類　肉あはびのごとくえりかはらくうすく白く黒まじり
斑点ありて形胡蝶のごとし面白き介なり

蛍介　和名浦の名　百貝圖ニ所圖ノモノハ異ニ之

螺類　俗称がんがらと云ものちいさく肉あはびのごとく
光あるを云かは黒くあらし　拳螺の類なり

莚介　和名かしの名

螺類　むしろを織がごとく縦横に網のもじ筋ありて埒を
白く褐色の斑点ありて斑螺の類なり

山多介　和名かしの名

螺類（らのるい）　かしまでなり横（よこ）よ薄（うす）く筋（すぢ）ありて地白く岩の
おほくなる色の斑紋（まだらもやう）あり斑螺（そんら）の類なり

蘭（かぢかうるは）

蛤類（かうのるい）　あさりはまぐり小介なり地白きやゝむらさきの
うつまゝにて隙やあり紫貝（むらさきがい）よりあつし

香箸介（かうばしかい）

異類（いるい）　是ハ海栗（うに）のたぐひなり尺ほどく和らかし名を命（めい）
ぜるとて見へより中の肉海膽（うに）とて淡（らふ）なり色黄なりかハ栗（え）の
ごとくいがあり是香箸介（かうばしかい）なりいがの下ハ又皮（かは）あり介れ
おそし甲介（かぶとかい）と云ものゝさまあれ

海燕骨　百貝圖 総角 圓坐貝

異類　これハいかたこの類なり本艸原始に圖あり綱目にものせ
ざり大和本艸にもありける時ハとりみちの介なれども肉去て殻を
出でむかしのものの数なりけると云ふでもと云殻をきさやう介と呼
たとへバさゞゐのたぐひが花形に彫刻せるがごとし甚多きものゝ
摘花螺 これも多し異物なり

紫介　和名みどりのいし 又云 貝のかはら　百貝圖に飯櫃貝と云

蛤類　おほく黄ミ多く肉去殻なり本艸云紫貝にありて又一種
中の唇に細きさゞなみ小児おとなぬさばさらばれどもなる
殻り表は地白に紫の紋ありより紫介と云郷り後の他に

入紫貝是なり 宛に云紫貝ハ紫に云紫貝之又ハうらむらさきと云

蛤類

姫蠣 和名浦の名 百貝圖ニ姫貝ト云

利仙の中に入たる梅介ハあらめなり 横にちぢみあハすじ高くあり此ひめさゞれハちゞみなくすぢこまかにちゞのごとくなるものなりて小介なり 光りよくやさしき介なり

甲介 うにつが うにのから 百貝圖ニ霊蠃子氏云

異類

かぶとかし介の下に弁なるがごとし海栗の殻之自きまであきあり甲胄星のぶいと丸星なり異ハ数なり大小数種あり

蕨介 和名浦の名

蛤類

かしもて形うるさく色褐色なり小介之名似つかね介なり

筍介（たけのこがい）　和哥の名　又ぶとし　百貝圖ニ箏貝（ちくばい）見

螺類（らのるい）　すきのこれどもくさもれぞろり長し　いろハ褐色（かきいろ）の志ろき黄
さながら蓋としたてきずじ河をもりしハ和哥浦ふしるしと云又
迎耳（らうこう）たけのこ介と云ましハ雑子（きく）に似て小よりて名とし鑽螺（さんら）の類也

松虫介（まつむしがい）　和哥の名

螺類（らのるい）　色まつ虫れどくたてよきすじ河をもすじ横（よこ）にもすじあり
艶（つや）も何ちとくよ見介（かい）なり

牛角介（うしのつのがい）

異類（いるい）　うしの角（つの）れどもしふもれ方のこぐちに口ひり紀州（きしう）
瀬戸（せと）より出る細長（ほそなが）ふも稀（まれ）にあり色白し又うもと褐色（かきいろ）なるとなる

異物なれどもいやしからぬ介なりとてよきくしなり

玉椿介　和名の名又白椿介とも云

蛤類　雪白白玉椿の葩一片落しごとく佳なる介也

丸くしてほりの入たる中薄し

糸の尾介　和名の名　百貝圖にハ捻貝と云

螺類　色白く長てふくれして歯のく入て白糸を絞て

歯くがごとし其てよきじ入よれ介なり和名浦に出る

酢介

厴也　まつ螺類の介の厴なり黒き所り白くさきてる

あつき皿に酢を入きあてハはし酒語よまよ多しと云

古しへハ得ぐとしと云て本艸ニ云郎君子相思子是なり

き数ある介

無對類　白き小介形り薄く緑ちやじのごとし片方かし幕

総角介

異類　ちいさやく介の久しくさゝれくへおち下そう残て

しをと云なり又ツよ花れごとく刻みなせるがごとし異物也

曲介　大和本艸の名えまうづ　和名かゐハおや介と云
百貝ノ圖ニ濱葛ト云

異類　本艸ニ所謂石蛇形り肉のまゝ蛇のごとし多ハ

螺尾なし　稀ニ尾のあるもあり異物なれども多くあり

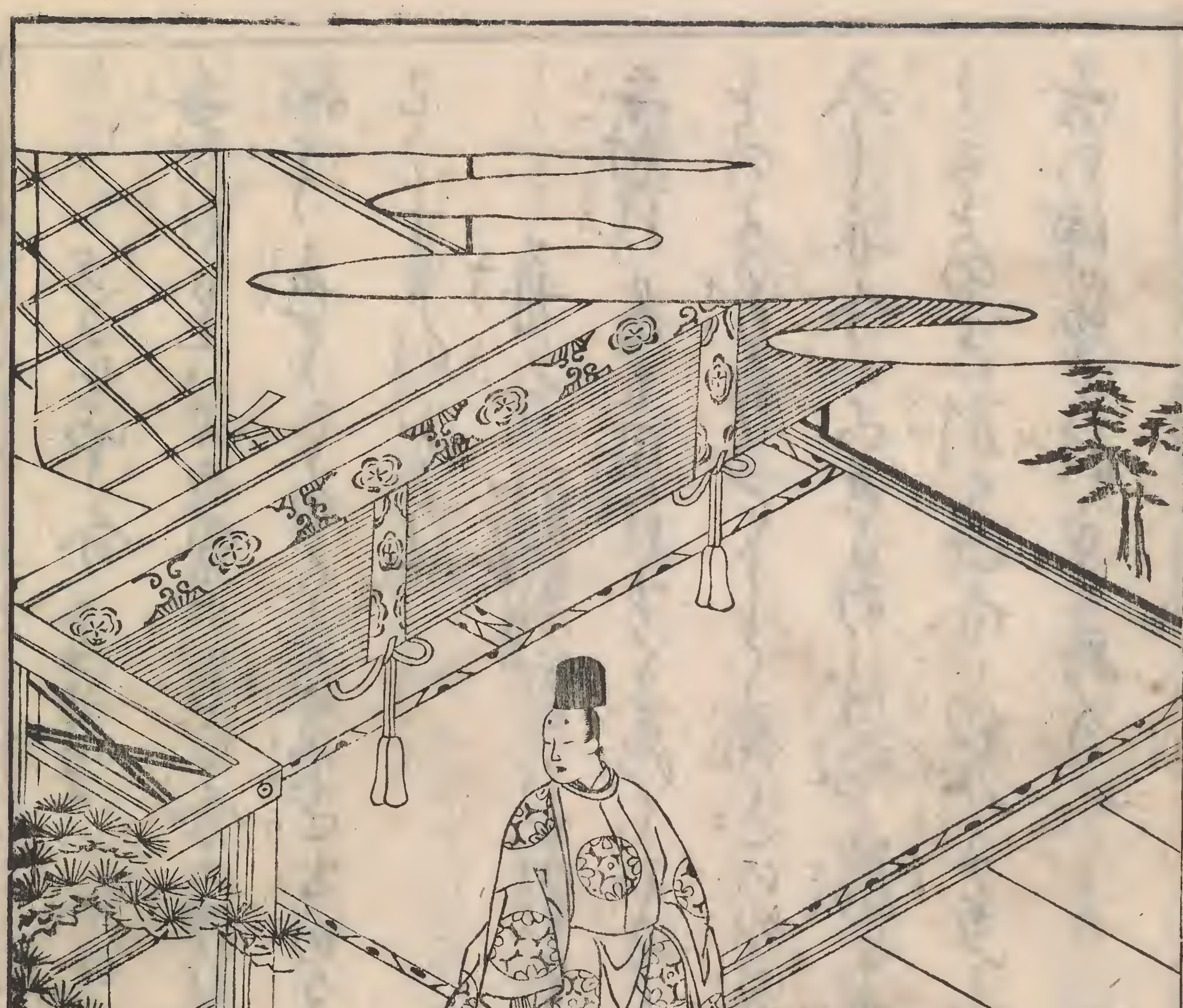
又かくハの如き奇なるものもの貴のハ各白しかじ黒きふあるもの也

くじや貝　和歌浦の名

無対類　是はよめがかさかさし貝の類なりくじや家を葺るなり似たり色々も白く又紫色もあるは面白きさまの縦横にまじはりなり

舟貝　和歌浦の名　百貝圖ニハ松貝又黒須貝ト云

無対類　是も同類にて薄くあさし中小なるはまぐりのごとくその色おとなしく褐色のかたちあり地はうす白し紫に入し舟貝は是にあらず前紫色に舟貝と云後紫色にいろ貝といふものとは別也此貝は但州に多し舟貝の名を呼は和歌の浦にかぎれる事なり





螺類

蜻蛉介　和哥浦の名

出てふとく底まるからら尾同じ姫とさへ艶よし其

地うすかき細き筋まはりかき介之形なり

和哥の浦よりあり

螺類

巻筆介　和哥浦の名

出てなり斑まじるくまき筆のごとしさきそつる

色うすかき色あり

貝類

蒲萄介

貝子の小きうすれとその姫どうのあつく熟せし

ごとくきれぬく小介ふさく生同うしたる介なり

貝子（こやすかい）たからかい　遂貝とも云よし　百貝の圖にみえたり

是ハ古へ寶として交易に用しものなり委ハ貝經なとにみえたり錢世よりまへ貝子をもちゆると天竺にても貝をまもり碁石れいとしてかりそめにもちふと云て錢のやうに用ひとなる色いろいろあり東海夫人の類にて婦人産するに手にもたせば安産すると云ふ是によつてこやすがひといへる能も此說本草にハなし此土の俗說なり諸方ともに多くあり

螺類（らのるい）　西がたる

紗谷浦の名　百貝圖ニハツベタ介を西がたると云ハ誤し
古名清しくよ見へたり

色白く細くながくすぢ横に入て有る介なり多くハ此名にて雅なる程別有名をしるべきものく

はまぐりよりは甲高ハおほかる貝のやうなるがちいさくて口の狭細長くとがる貝のなり
武蔵国金沢といふ浦にありしを西のかたのハ石ぐりと申すとぞいひし

孔雀介 異名し

蚌類
ちどり介かゝる介の名を和歌浦にてかひたりよりざこなる吐撰なる名なり

しゝみ介

螺類
此くし色ハいろいろ何をきをきやごとも云之小児あそ
浅貝と云伊勢より多く出ル諸方に多し 絶年に
小児戯弄ノ説本草貝子ノ條ニ出 其外ニ不見 然則此貝ト別也
ふくら介之 大坂にて糸まつまき貝とするなり

車介
和名かしの名 百貝圖ニたたき貝と云

螺類
さざえも志ゝみの類にして色わる黄なり裏の中に穴ある

らうぐへし是は車(くるま)ねじとし因(よつ)て此名を呼(よぶ)とみえたり

刀介(かたなかい) 和歌ふしの名

是本草に云馬刀なるべし馬刀をまてと和訓(とくん)せるは

蚌類(がうのるい)

非(ひ)なりまてハ蟶(まて)なり此介(かい)ハうすくろみ白く褐色(かきいろ)の斑(まだら)

点ハの黒介(かい)なれども薄(うす)し是もまてげの類なり

石畳介(いしだゝみがい) 和歌浦の名 百貝圖ニ螺貝ト云

螺類(らのるい)

これ先小のまとるちくる貝の類ちくて大なり縮緋がんがうと

云ものく赤(あか)と黒との段(うんまん)交りて石だゝみのごとくなれどもあまたに

よりまたく名とくれる歟

鵜松介(うまつかい) 和歌浦の名

螺類(らのるい) 口大きにして舎(うま)のごとしおわろく横筋(よこすぢ)あるも中貝なり
よもにそのふハなりけれ

抓介(きさごがい) 二種有 百貝ノ圖ニ丸キ方ヲ文殊(もんじゆ)貝ト云
又色黒クコキヲ油貝ト云

蛤類(うつのるい) 二種(しゆ)あり一種ハ青色抓いろなるばより名とせる歟
近頃(ちかごろ)和哥浦にて云抓介ハむかし出てなる蛤と抓介まじりて
筋ふかく入色うすきあかきなり白きを〇介と云なり

鳴戸浦螺介(なるとからかい) 和哥浦の名

螺類(らのるい) 丸きやうなる介(かい) 鳥とおほくして立ちなお乃螺類有
あまりのおほきさ稀(まれ)ハなし

蓑介(えのかい) 二種 百貝ノ圖ニ あこやめの方を羽貝と云

一種ハ蚌類 にし此介の形に似て大介なり はまみのごとく
節あるくぼみうちも白くまき〳〵うつりありかき介なり
一種ハ螺類 ぬくれる白き介にて縦横に節有りてふうし これは
和哥浦にし云名之然ども其の方形状善によく似つけれは似つりた

漣介 百貝圖ニ簑貝ハ楯貝トモ云
白く横長く横になかれども筋あるくぼみて入艶き

蚌類
介なり中介小介なり

千歳介 和哥浦の名
小介にし地うすき黄にて褐色の横筋を地わりたに光あり

螺類
ざんちし介 和哥浦の名

図なし

図なし

螺類（らのるい）　みじかく志ろく褶ありて周し色あしたてまかへ紋あり絵合にハ稚ほど

蛤類（がうのるい）　潮吹介（しほふきがい）　哥仙ニ入　百貝圖ニくかの貝とも

哥仙の中よりとり介を云又志ぶき介ハ別なり

がうな

螺類（らのるい）　あまハ古名（こめう）なり昔（むかし）より名（み）を呼（よふ）介（かい）こまく下ゆしそのり

まくれける介ぬりいやしく面白（おもしろ）かりし故をもつて大和本草よ

かうざいと云その是なり

大和本草 巻ニ
海ホウザイト有

蛤類（がうのるい）　蜆介（志こころかい）

後哥仙（ごかせん）よ入花介（とるかい）なり白くまじゐるく立（こち）かぬ色の

志こころれどとしこれを花介と云ハ誤（あやまり）なるべし

落なし

落なし

此條之うつ介ハ蛤類
うつせ介の誤字

落なし

落なし

千色介　かし記介を云　和歌浦の名　歌仙ニ入

蛤類

玉介　異名也　歌仙ニ入

蛤類　俗称ほべつき　歌仙に入られざ介之類やうやく此玉

ちぶ滑なり多き介形りでもとの記色

やしろ介　異名和歌に云かゞり　歌仙入

螺類　俗称うづら介後歌仙に入られぞ貝形り

螺類　八鬼介　百貝図云片部貝角片部氏云或ハ雲貝と云りのり

こしげるやゝ茶邪ゝ之色なりわろくし記

介なる地白く紫のかとりて角ありさゞへの類之下品

山椒介

螺類　大さハさんせうのごとし色も赤く乾山椒のごとし大和なる岸にて見へたり豊前国藍嶋より出る細川三斎子名を付給ふと云り和哥にも云ものハ是等のたくひ余豊前あるを聞るものを

糸縒をきしやなる介なり

鏡介

和哥にもこの名　百貝圖にも同名

蛤類　梅花介の大なるを和哥浦にて鏡介と云

長辛螺　百貝圖ニ香螺長螺よなき貝とも云

螺類　なかにしにありかしらくちのごとく色く縦横に皺いつも地はきを白くかし褐色のくりつまを

磯介（いそかい）　二種

一種（しゆ）ハ無對（むつい）なく哥仙に入 俗称よめがさら 大和本草ニ曰（いはく）
よめがかさ和名なし 鼈皿（べつさら）とも云などのあり
一種（しゆ）ハ螺類（らのるい） がんがらと俗（ぞく）に云ものゝ類云 和名なく
かさら介（かい）
螺類（らのるい） 長てある中貝なりいふ 形（べい）らんのごとくなて小筋（こすぢ）
入（いり）やわらかき介（かい）なり
笹（さゝ）れ露（つゆ）　一名亀介（かめかい）ともいふ 和歌浦の名
異類（いるい） 白く薄（うす）き小介（こかい）ものあり 亀（かめ）のかたちに似（に）たるむりし
和名なく亀介と云ても今ハさしの露（つゆ）と云

紅葉介　異名なり 百貝圖ニ片貝 紅葉貝 馬のくちと云

無對類　右の外に入がたし介を云よめがさらの類なり

もみぢの葉のごとし　閩書云石磷形如箬笠殻上肉下 此介なるべし

伊予簾　和歌浦の名

蚌類　後の外に入がたしかいを云

口切介　和歌浦の名

螺類　竹子介の子を云和歌浦にての名也筍介とハ違く別種也

梭介

貝類　貝ハ片方より巻込しじくくわしあるハ八角のごと

くに出るものを織ひのごとし色ハうすきいろなり

猿のかしら　和名浦ふくの名

蛤類　本草云魁蛤の小きを云なり介の小きなりさる迄く
とも俗に云なり

雹介　和名浦ふくの名
百貝圖ニ合貝ト云

螺類　あくまき蟇のごとく黒まるくちゞみてなりふくれたる子の

螺類なり大和本草螺と云ハ是なり

夏桃介　和名ふくしの名

螺類　たかしのやうなるもよく黒く或ハうすきかたちとなく

定なりともなし貝なり此名附付ぬ名なり

かや介　和名ふくしの名

螺類　厚き介なり艶有て地うすく白くかきの斑点有て
うつくしき介なり至て滑なり
　女郎花　和歌の浦にて茶碗介と云
蛤類　形も色も丸介に似て軽薄し大小有て遠州に多し
和歌浦にて茶碗介と云ハ大なる俗名なし
　島海贏
螺類　是ハ小児のまハもてあそひに志賀都の紋也と云之色かきこ有
　編笠介
異類　此是ハ和歌浦にて名付しものなり此形似よりなる
然ども介の類とも見えず石燕石花の類にして異種なり色黒し

貝は松茸(まつたけ)のやうなるおき節立(せつじやう)なり色黒斑し

岩亭螺(いしかし)

螺類(らのるい)　ぶりしと娘きるいか多し色ハ黒しよくうぬ貝(かい)く

瓔珞介(やうらくかい)　和名なしの名

螺類(らのるい)　形状(かたち)圖(づ)にかゝざれバ盡(つく)しがたしとハいへどもかきとなり

蘘荷介(めうがかい)　百貝圖ニ賀貲貝ト云

蘘荷介ハフカノ肥也
豊前ノ小倉ニ多シ

異類(いるい)　これハ貝(かい)ともいへど魚物(ぎよぶつ)のやうなるゆゑ又魚部にも
あらざれバこゝでの類にやうがれに(こ)ぬぐく色白し圖(つ)にあらざれど
筒(つとし)ぐし和哥の浦より出る二寸ばかり中の肉を去(さり)あるやうひきてゐる

矢形介(やがたがい)　百貝圖 富貝ト云

螺類　艶光有てなめらかし中介なり小介になし黒漆にて塗たるがごとくなるを又潔白なる大螺有りてつんのする介あり稀にみることなし

網介

異類　色づくしきものなり色濃紫あみのごとくまとひし有を竹野浦に出る稀に白きものあれど全き介を見ば多く破る
あまり大なるはなし稀なり

巻絹

螺類　白く滑なる介にしてなり稀にあり大小品もみゆ

蠶介　和歌浦の名

貝類　片方よりまき込小介なり白く薄し和歌にも竹野にもみゆ

絹たゝみ

螺類　是ハ此介の類多く出し角あるものなりらいハこ
こきぬつゝきぬ螺介同類の別種なり

蓬介

蚌類ハ厚く白きゝるのむまのおとし前の仙紀ヶ見を採介
くろき名付入しハおそろしくハ誤なるべし

烏帽子介　百貝圖ニ爪貝又烏の爪と云

蛤類　白き中貝ゟおとしのごとし竹の浦ヶ多くみゆべしよ
名付あまたあり　萩の露

螺類　至て小く白き地に紫のかくみそはやあまたてなめらかなる小貝なりまろくしたる貝なり

苔衣

無對類　うすく色うすくすく物体貝の類也

白米

螺類　まるき貝の小貝なり白きを云赤きをますほ貝と云形ちは米のごとし　閩書曰米螺小粒如米ともあるべし

雪雀　百貝ノ圖ニ傘貝ト云

無對類　雀貝よりちいさくひくし梅花貝に似て雀貝のおとくもしなつま色潔白なる小貝なり

要介

無對類　扇の要福なる介也色赤黒し小介之稀なる介也

閉守

螺類　たてふかのく高く筋を白き長てなる介也いとのけよ
細く別形り

紅鸚哥

無對類　あいら介の形かくが外紅色なり小介也うつく
内も紅色なれども外より薄し竹の嶋より出る

むさ桜

蛤類　桜介の形乃やゝかくふりし色黒く多くハ白く

桂介器に
桂介をかり

蟬の羽ハ
ツブノ蓋ナリ

もげてありよりぬ貝かり和歌の浦にて是をいふと云

八重梅　和歌の浦にて八重の梅と云

蛤類　梅の花貝これ也くしげ蓋の巻に云同類別種也

桂介

無對類　わつく白き小がく紅のうつりありかうちれし

雪雀　小粉てもしれし

雪家介

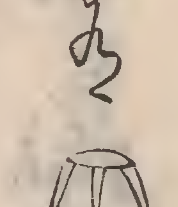
蛤類　白く縦横に筋細く立たる貝に似て別なり

蟬の羽

腦類　此介ハ至て小さなるかしらすく光りやわらかく

せみの羽にもまさりぬくち形ハ圖ゆうでハ盡しがたし

　笠壺　俗称でんがい介

異類　石に付くる肉なきハ落ても又  このやうの形

ちゝく裏ニ穴ありて下ハ底のあるも有又なかさも又色紅白

色よくもし多き介なし

塩屋風介　百貝圖ニかぢ壺ともあり烏帽子貝と云



異類　形ぬめちがやうに綺くして裙も色ちらくたてすじ有

　このやうなるもの多く夫物ヶ裏ニ穴あり

底ハいづれもぬけてくちすこし立

松風

蚌類（かうのるい）色白くして横（よこ）に細（ほそ）く筋ありて和歌浦にあり

薄（うす）き介（かい）なり

薄雲（うすぐも）

蚌類（がうのるい）底（そこ）厚（あつ）し地白（ぢしろ）くちらくと少し黒（くろ）き斑点（まだら）あり

鶯介（うぐひすがひ）　百貝圖には是を孔雀貝と云

蚌類（がうのるい）千鳥貝（ちどりがひ）の色あるものなるを云

巻物介（まきもののかい）　又九里ん介とも云

螺類（らのるい）縮るゞごとくの白き也てある介（がい）し是（これ）にして底（そこ）赤し

推の實（しいのみ）

螺類（らのるい）みじかく丸し白き上にかきの斑点（まだら）ありて椎（しい）乃實（み）の

おとしぶくろに似たり　鱗螺類なり

花筐　是神にある八鬼介と同物歟

螺類　角ハ所々をのなり　亦横紋ありて異形なる介なり

うつくしく白くうす紫色あり

玉蔦

蚌類　なでまへく浅く筋多くも白し中介より小きハ緒なり

巾着介

蛤類　きんちやくのごとし色赤黒くいろいろ介のからなる方

二つ合せたるがおとし　ぬれたる見なり

枕介　二種あり

螺類(らのるい)　みな貝の類かたく黒く疣やありて斑文(まだら)あり
一種ハ奇仙の中よわらかし蚌類(かうのるい)なり

螺類(らのるい)　悪鬼介(りつきくゎい)　百貝圖ニ百鬼貝(ひやくきかい)漣貝(なづれ)とも云
ゑり多くある小介(こかい)よなし稀(まれ)なるものゝ色ハ白し頭(かしら)
嘴(くちばし)ハやゝよろしく是ハもちろん多くあれ刺螺(しら)の類なるべし

腰高(こしだか)　百貝圖ニ盲貝(めくらがい)と云なり

螺類(らのるい)　うら打ヲ細て筋(すぢ)よのくゝね介(かい)形り俗よこらしゐる

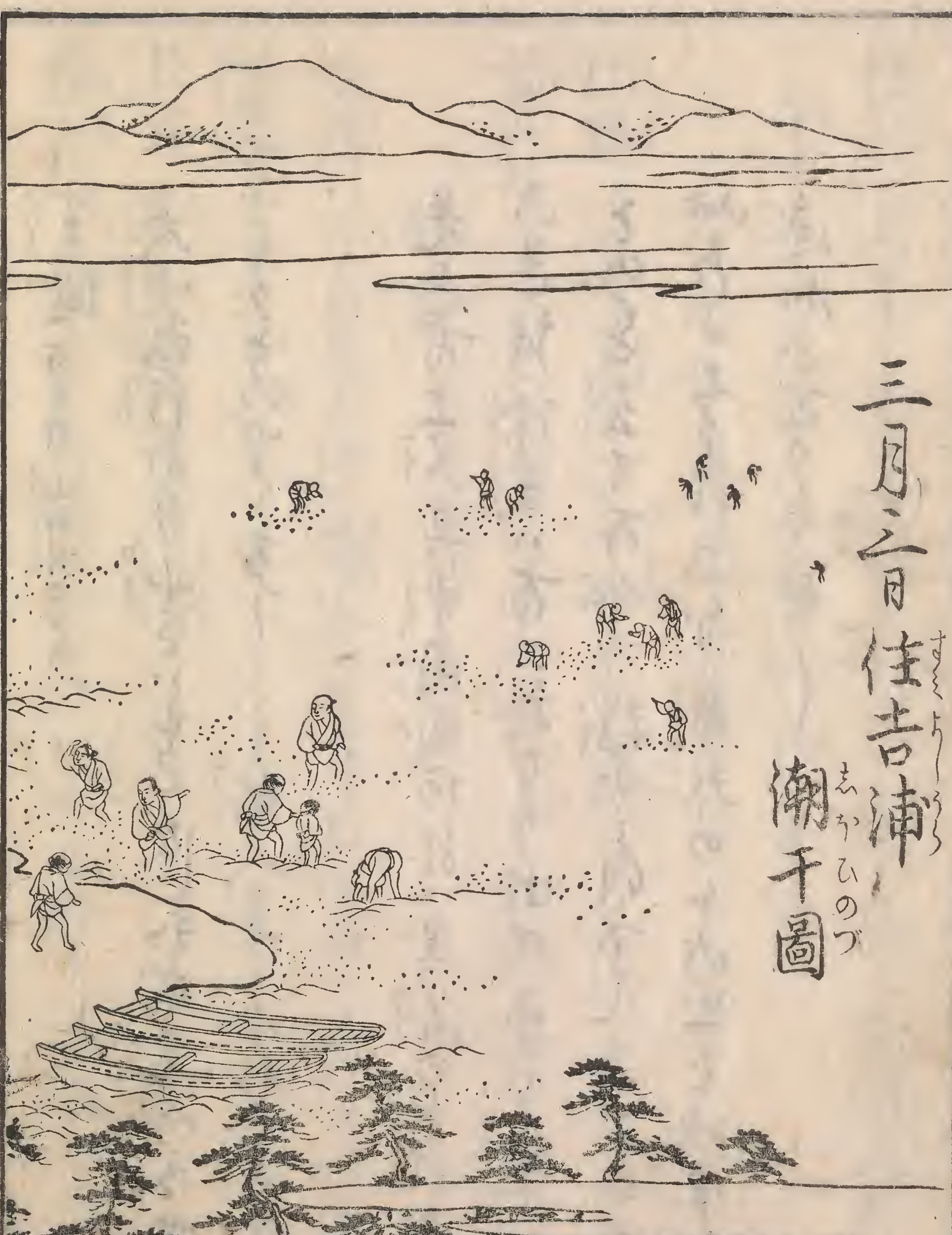
鬼蛤螺(おにさゞゐ)　百貝圖ニ大角貝(えくかい)と云なり
かんかうと云下品(げゞん)也

螺類(らのるい)　角(つの)多くある花介(くゎい)なり小介(こかい)よ形し下品なり

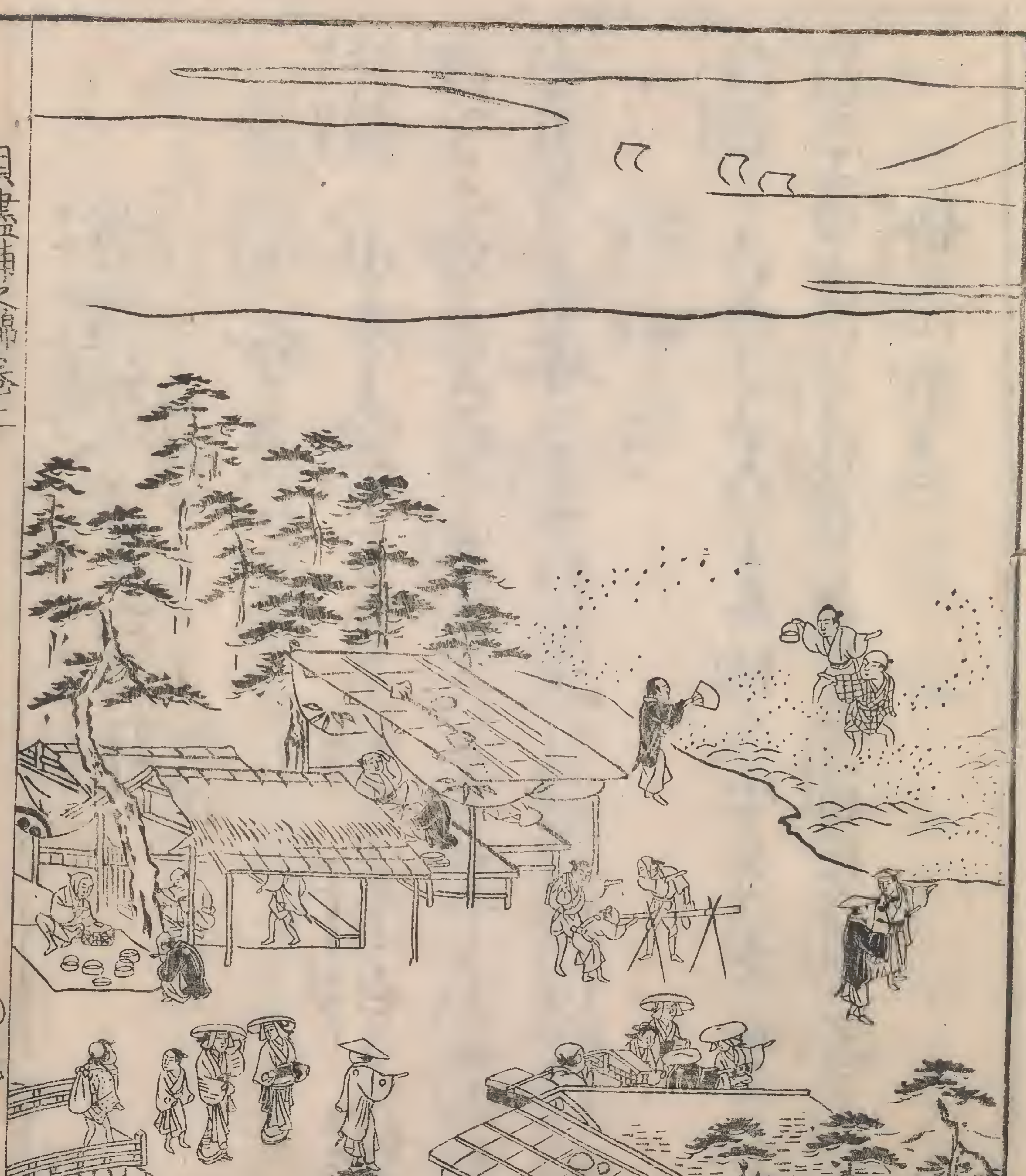
紫雛 百貝圖ニ玉琲貝とも云

蚶殻　大小数種あり小さいはちくなし和名よ小介のを世多よ
合浦小あるものかく多し又形人多くあれるごとし

是ハ百十名貝中圏圍の類ハ異名のこれ九品
あまた残除去バ百二種なり此中にて得られ
そのほか去て百介の数ふ入べし又十六介ハ
此たびよるは此外集外のもの出だ添和
追加にあるもの画し



三月三日 住吉浦潮干圖



前歌仙介三十六品評

簾介　左一

蛤類　小さきハ少し大なるハ多し大小色〻あり紀州吹上乃濱を以名産とす　かき色あかく横にあるくふとく筋立竪にすぢ黒き紀あとめありよ紀介之上品

舊なの異ハ今宮ニ云ことのあハあらば阿州より出る
簾介よ似たりなそへなし横すぢのさかへ

忘介　右一

蛤類　ういぬくせつよ務細くふかく入其外好き介よ似たく別之生日ニ紀ハ外横長く横よ小筋ありて紋か黒くさいろくあ

梅花介　左二

蛤類　白くにやなし横ニ細く筋立し介なりあまた梅花乃
一瓣落たるおとし此介小蛤にも違ふの多し八重梅緑萼なと
まちかたし此介の大きなるを和泉浦にて鏡介と云

櫻介　右二

蚌類　此介まへ弁せしおとくあまたの介を櫻介と名付入ぶ
おほそくハ謬かなるべし櫻介ハ薄く赤き介の舊説の図よりて論ど

片介　左三

無對類　これをみな貝と云ものなりよわがさらのことくなら
れどもなりぬるなどと云是又同類別種なり

石決明　右三

無對類 世よするごとし廿卅かを出せり小さきもの稀なり

蛤類

紫介 左四

紫貝ハ此歌仙に入ハ和歌に多く云むらさき貝なる事も
右に云裏紫と云介なり後歌仙に云紫介ハさくら貝と云
をみし唇にさくらみて地白く外のかたうすき紫介アるをしてはし
後歌仙の歌是なれバ七廿卅に云紫貝ハ又貝子の数に多く別格なり

白介 右四

蛤類 此歌仙に入ハきつこう介なり後歌仙に入る白介ハ
別なりきつこう介を後歌仙に花介と云ハ恐らくハ誤るべし

蛤介 左五

蜆介　右五

右歌の蚌介ハあまた世ニあるといへども二種あり雅なる思介なれども古歌によみ出しが幸となりて和歌の数ニ入しなるべし

濡介　左六

蚌殻ハいゝもとゝく常ことなり蟶ニ似て小し大なるもれなしそぐさやまし

蟶介　右六

蚌殻　世ニあるとし小きものハかし馬刀とまれと訓ざるハ誤也

花介　左七

蛤殻　是ハ櫻介と云ものゝ花ちいとも云べきものなり

赤くうすき貝なり横に長きを色貝と云是を桜貝とよ
そうちゞの呼人あり貝類多く別種にして和名紀にハ花貝と云り

瞿麦貝　右七　百貝圖ニ海菊と云

蛤類　厚くあらくしく筋やはしいらくのやうなるもの又
色濃紅なるもあり又大なるハ色あし小さき種をよしとし
此貝いとうつくしくやさしき貝にて紅貝と云人もあり錦貝をなで
しことも云し人も有後分紀にハ錦貝をなでしこと云りいづ
れか是なる事をしらず錦貝にハ又色々多くる錦とも云べしなでしこ
にハ若の多き是をもて桜ハ寸にも撰に入ざる方なでしこなるべし後分紀ハ誤なるべし

空背貝　左八　百貝圖ニハ甲貝と云又ハかぶら貝とも云

螺殻　此撰にハほらべき介を云後拾遺にハうづら貝を云和歌にて
云ものハ又別に二種ありいづれも是なりされども此撰に入
うハせ介ハ和歌にてハ玉介と云又古来歌学の説にハえらべく
肉のなきをうつせ介と云よし見えたりされバ此歌の伝に
入ハづ魚介の死たるをかし貝殻又ハ空螺と云ものなり

袖介　右八

螺殻　此歌紀にて入ハ小さき介あまた地底にいたるものあるもの
をいふなりそで貝と又一種和歌にあまた云ものハ別なり螺介にて
口の方袖のごとく長く出しをと云大なるを俗に袖つ貝介と云ものヽ

舟介　左九　百貝図ニ猿頭と云

蛒類　此撰に入る船介と又船子浦なとと云船介とちがふ船介形状文まつくしかくし図も又それかくしきをみよ何されバさげかくし

蜑介　右九

無對類　此貝ハ昔船子なとこ東が爪と云しを今ハ是を船子なくも又あま介と云厚き貝にて地黒く白き斑文多くある介なり

浦打介　左十

螺類　是ハかたに一口あるとて總名をのみ持まゐらハちがふ大きく或ハ小さく色よき介がしらあつくあさ向しまくらうちげのごとく細き筋有る

礒介　右十

無對類　さ連よりの皿われかけて又ハ盤にさらなど云俗称なり
一種いそ貝と呼ものハ百貝の中よ弁がごとし

佐多類　左十

螺類　世ニ多くあるごとし小きものかし爪さるべとて
又一種あり俗にハさゞいと云なり

千種介　右十一　百貝圖ニハ白黒く彩色あり　かゝるもあるなり

螺類　下ハあり形きりくるやうにて小さく満り色こく紫をびると云
色わろし小介のごとくに無益もなし

物あら介　左十二　百貝圖ニ空蝉貝と云

螺類　色白く洗やうなされしものハ洗やぬけ出し立やうるハ

悪しきは形図なくばきはしかるべし

津貝　右十二

螺類　物あり貝に似てかたくきよし其地白く
褐色斑文多くありし

烏貝　左十三

蚌類　形ち長き貝に同しく色黒し白きは褐色のまへり
あるを長香と云又あり縁より白きを黄貝と云なり諸
同物多く色のよりよく名ありる

雀貝　右十三

無對類　石に貝に付ありて肉なきは碗中にありて色くさ

白きも又麁かき色なるこれも二種あり又纈白にて背ひく
ちさきものを雪雀と云かさち雀に似たり多くある介なり

都介　左十四

螺類　からに似たりうすあかきの地によく筋ありかいかくあり

梭尾螺　右十四

螺類　本草に出たり又法螺とも云なり形状世にある
おとし小さきものなし

車渠　左十五

蛤類　俗にしやくし貝とて大なるを杓子に用ゆるもの
なり殻ハうすく色ハかハし世上に多くあるごとし

さて貝とも云文海扇とも云多き介なり文蛤貝と云ハ
大なる誤なり

色介　右十五

蛤類　此撰ニ入色介の圖あまたかくしなでしこ介を
色介とも云櫻貝の老てなるも色赤きによりて色介とも
云あるハ此舊本の圖乃やゝ拙る貝ハあかみつよく
半誤りなるべし按ずるになでしこ介ニ錦介を當れば此
色介ハ丸き形のなでしこ介なるべき歟

破介　左十六

いたづきの介ニかくも破るゝと云なり此撰ハ悉く古歌を求て

かやうのやくにもたゝざるものを入をり

蛣介 右十六

是も蛣ある類貝をよぶべく云ども圖ハ螺の類ゆへ長て
なりたる蛣つきさんの出る城圖せり

小介 左十七

甚だ小くこはくのごとき介と云り

真藻物介 右十七

螺類 大なる米粒のごとし色白し藻末ゆへ深る
やくなるが由へ名付しとみえたりすべて小介ゆへ大なる
ハなし白さを志るすが介と云後ろ仙は入る事多き介

是とハ大に別なり

浪間柏介　左十八

蛤類　かくのごとく合しハかし婦さハ浅くこハ厚しうち

其に光あるまでうすくきえねく介形多くあるものなり

或家書にかみまうしハと云ハかさと云
貝なりといへどもかさとハ大に別なり

貽介　右十八　百貝圖ニハ塩貝と云ものに似たり又別に貽貝あり　蛸貝黒貝とも云

蚌類　これハいがいとも声なく云なりおなじく云いがいと付

蜀とハ大に違へつる此蜀によるの時ハ但州に多き名の折れたると記

介を云竟志を弁ごとし西行の哥によるの時ハ阿こやと（阿児の浦おんせ）

云趣ぞれハ貝と云べし寄れあとし云ハ中乃真珠を

ふしうろと云意なるべしされども真珠ハ石決明より
出るものなり貽介よりハ出まじ此すくなかるべし
識者不審を述べし和名抄に云貝ハ青黒にして横に
長き介なり多く白くさまをげあり

右の六く貝合和名とて世に行るものゝ法を係る多と
図ハ別に記く下巻の貝合せに見るべし


但馬竹野浦真景圖
洞穴
天神社
塩濵
竹野村



加島
飛島
弁天社
竹野川
舟小屋

後花仙会三十六種評

前花仙の撰ありしを臨時て其後雅人出て撰ひなりとも細形再せしを評ハ後花仙乃序文に見えたり全書これに附きて見るべし

まさき会 左一　前花仙に同し

ワすれ積会 右一　前花仙に同し

梅の花会 左二　前花仙に同し

花会 右二

右の物にハ櫻介をえらびとりて此撰に入ハおさむる介と云
をあかり是を花介と云事ハこのりし萬圖の僞
あらんか赤くいろある介を云ゝ惠きや

櫻介　左三

蚶類　うすく赤き介なり光てるを和名にて色介と云
みじかく小さき故櫻介と云此圖に合せり

雨もふ介　右三

蚶類　みじかき蚶の蚶ゟ蛤よりちいし表ゟ吹介と云もの
小く色白くくろきかすりあるを和名にて云此撰乃
圖も是なり右の物にハ螺類の介なり大に相違せり

いづれ貌是なる事をしらず或説にまよひては介ゝに稱して
越前の色の濱より出るを真とするよし色の濱はとの
余未しらず不審

かしは介　左四　前に論ずるがごとし

いろ介　右四
いろと名づくるハ舟貝とおなじ物に云こその赤き色あるを
そのもとを云なるべし又なでしこ介のやうなるもの色和らかなるを云ハ
櫻介の横に出きを色介と云ば是非あるべし

からの介　左五　おなじ物に同し

みやこ介　右五　おなじ物に同し

うつせ貝　左六　本歌仙に同し

さたべ　右六　本歌仙に同し

むらさき貝　左七

此番ハ本歌仙にちがひさくら貝の方なるべしさくら貝の

手前の百貝此中に論ど

ますほ貝　右七　本歌仙に同し

なでしこ貝　左八　本歌仙に同し

ねこまのしへ　右八　本歌仙に同し

さゞなみ貝　左九

あまたハ和歌浦にてさぐ濱と云貝なり百貝の中に注し侍る

はくり貝　右九　百貝圖ニ塩貝　塩津貝とも

蚌類　大なるハ稀し小貝あり色白く清やかなり

一種ニ和泉の浦にて云ものハこまし貝のごとくなる螺の

類なり色黒く圓色れ斑点阿り

千鳥貝　左十

蚌類　かたち鳥れおなじし烏貝と同類にて千鳥の方ハ

白くきはしかさのう門ち阿り多き貝なり

まぞめ貝　右十　　お寄仙に同し

いさや貝　左十一　　お寄仙に同し

あこや貝　右十一

蚌類　前陳に入るものと後陳に入るものと圖お遺せり
此撰に入るハ和名なしきんちやく貝と云ものに似いづれか
是なるやを志らずわこや貝ハい貝といへるよし　前に
論ずるがごとし
わこハ阿兒と書海士の兒などを云なるべし　貝の名にハあらず

あハび貝　左十二　前陳に同し

かうし貝　右十二　前陳に同し

うはせ貝　左十三　百貝圖に八代貝と云

螺類　うづら貝と云もの形ちいさくあつくくち
うづらの生れどくかさ色の斑文ありうすくよき貝に
紫貝ハ前陳の中に評ぜ

こなし貝　右十三

螺類　上黒く下白くしてはまぐりくるやくしからぬ貝なり色あいうつく
あれども地白く黄赤きところ多し桜に十日多く紅点
このなよ貝をよみし歌なるべし後に強て一種の
貝の名とせし歟

あさり貝　左十四　百貝圖に白貝と云恐らくは誤なるらん又高濱貝と云ものこれ也

蛤類にて海ぐりに似てかたち横に長し紋はいと細くあり
紀州より多く出るはまぐりと同じく唇圓有り輪ゆ
海ぐりより文いろいろ面白さこのみ大小好みに任せて見る

志ほ貝　右十四

蛤類(ごうのるい) 小介(こかい)ハちいさく大なるハいまだ見ず色(いろ)白く紋(もん)あれし稀(まれ)に
鱗(りん)あるもあまたかし也ごとくるやうなる介あり多くハ

楞(まの)あし介(くい) 左十五
おなじ仙に同し

かゝり介 右十五
おなじ仙に云津介(つかい)と同楞類(おなじまのり)此名(このづ)ハ口さがりし介と云(いふ)
そのよ同(おな)し是雌(ひ)雄(、すぐうんぐへい)

あしかい 左十六

蚌類(がうのるい) 和名(わう)からすかいとて云介あり大きさ介(かい)の
形(かたち)に似てまどろし地(ぢ)うすく黄(き)にこいろきの芦(わし)れやうなる
文(もん)ありてやゝ大き介(かい)なり小(ちいさ)きハかし大(おほき)なハ多くハ介(かい)あり

みおゞ貝　右十六　前歌仙に同し

たゆゞ貝　左十七　前歌仙に同し

ちゞみ貝　右十七　前歌仙に同し

小貝　左十八　前歌仙に同し

ちくさ貝前歌仙の器をたぐくり是ハスヾメ貝の類

ちくさ貝　右十八　前歌仙に同し

以上後歌仙三十六品の評なり両歌仙合数あるよ後歌仙の多要し此撰を用べきことなく前歌仙有九種後歌仙に九種合十八種別の貝あり是ハ名も貝をも別なり

三十六の内前後ともに同じ名あるもの二十
七種あり。この種ども同名異物のもの七種中に
両歌仙介数をなせば五十二種あり二十種ハ
同名同物なり
始の介名寄百二ハ歌仙五十二種入熟計
百五十四種あり余が見聞の貝尽ぬ尓来
又及ぶものハ追加して記べし

源氏巻配當目録

桐壺　月日巻

帚木　おし巻

空蝉　本名　又せミ巻とも云

夕顔　さゝめ巻

若紫　ころ巻　或もとめ巻

末摘花　位に巻　一名おもでして

紅葉賀　もみぢ巻　一名かくし巻

花宴　まがり揺巻

葵　本名

賢木　たこゆ

花散里　かとくぎん

須磨　まかすき巻

明石　まされ巻

澪標　うしの爪

蓬生　みちつが

関屋　まかじ里

絵合（ゑあはせ）　志かのまき

薄雲（うすくも）　本名

乙女（おとめ）　わくハじや

初音（はつね）　うぐひす介

蛍（ほたる）　本名

篝火（かゞりび）　色介

行幸（みゆき）　山香介

真木柱（まきばしら）　うぐひし介

藤裏葉（ふぢのうらば）　うら紫介

若菜下（わかな）　甲介

松風（まつかぜ）　本名

朝顔（あさがほ）　本名

玉葛（たまかづら）　本名

胡蝶（こてふ）　蝶介

瞿麦（なでしこ）　本名　又錦介

野分（のわき）　むし介

藤袴（ふぢばかま）　本名

梅枝（むめがえ）　紀さら介

若菜上（わかな）　ひめもぢれ

柏木（かしはぎ）　つじめ介

横笛（よこぶえ）　たけのこ介
夕霧（ゆふぎり）　牛角介
幻（まぼろし）　きせとる介
竹川（たけがは）　ちゝ貝
橋姫（はしひめ）　玉つなぎ
総角（あげまき）　本名
宿木（やどりぎ）　爪付介
浮舟（うきふね）　舟介
手習（てならひ）　まつさか介
鈴虫（すゞむし）　まいむし介
御法（みのり）　赤貝介
匂宮（にほふみや）　ちさる
紅梅（こうばい）　屋形舟介
椎本（しゐがもと）　志のはな介
早蕨（さわらび）　まくり　石蛇之
東屋（あづまや）　くれや介
蜻蛉（かげろふ）　とんぼう介
夢浮橋（ゆめのうきはし）　ぶだう介

以上五十四種　此中前編に入るの七種を除く
四十七種を画貝の中に評判す

新撰六歌仙貝

前歌仙の中まそ貝あま貝の引歌貝の歌ともえらんじ
猶そのくハかすかすまじ袖貝舟貝磯貝烏貝思種ハ
引歌よくかの事もあれ貝きざ貝ハよろしく歯よろしう様べ
古連を除引歌は能かなへる思種よせる貝こる貝の
二つ古歌を通ば合て六歌仙の数とするを今左に記

左一　蝉貝　　読人不知

味木集
蝉貝の声ときけば村松の梢に浪の引音那りけり

右一　みる貝　　読人不知

味木集
おもほゆるいそびのあまてよさの海は浮びの浦に浪も寄ねべし

左二　袖介　西行

同
浪あらふ衣の浦の袖貝を汀に風のたゝみおくかな

右二　烏介　西行

山家集
浪よするしらゝの濱のからすがい拾ひやすくもおもほゆるかな

左三　舟介

夫木集
さく人もおぎさよする舟かいは追る風やはずかなるらん

右三　磯介　人丸

同
水底の玉にまじれるいそがいのかた恋のみぞ年ハへにつゝ

貝盡浦之錦上終